

子どもと夢

―夢は体感とともに在り―

上原輝男

我々は、課題「人間と夢」を「子どもと夢」に置き換えたい。それは人間と夢との関係がどうあらねばならないかを語るよりも前に、こうしかあり得ないことを知っているからである。一般的にいうなら、

夢を語ることは抱負や希望を述べ、輝ける未来に対して、いかに開放的になるべきかなどとしてしまう。また、それに積極的な姿勢を示すことだとしてしまう慣習がある。いわゆる「夢と現実」を対比させることをして、夢は現実からどこまで飛躍し得るかを述べることだとし、逆に現実はその夢をどこまで制限し、阻止するかであると思ってしまう。これに対して、我々の立場が、人間の夢を語るとはこうしか語れないとするのは、人間の誇大妄想性を排斥し、消極的な人間生活の現実性を守ろうとしたためではない。もはや、あまり意味のない夢と現実の二律背反性にさいなまれないためにも、過去の我々の研究会の調査結果を踏まえて、人間が夢とどう交わりながら生きていく動物なのかを、取り上げてみたい

からである。

1 夢の先験性

我々は、夢が待つ先験性に注目し、調査してきたのである。その先験性を別にして、人間が故意に夢を拡大するとき、我々は妄想といい、ほら吹きというのである。また故意に夢を失うとき、人は意気消沈といい、絶望というのである。私たちは、その故意的作為性による夢は問題にしない。いつてみれば、今日の常識とするような個性的あるいは想像的夢は問題にしない。先に述べたような、こうしかならない、あるいはこうとししか決められていない夢を問題とするのである。

こうした先験的夢を語るとき、注目すべき観点が二つある。誘引性と発達性である。大人を対象とするならば、まだほかに考えられもするのだが、先験性の表出としてもっとも顕著なる時代を子どもと呼ぶのだから、この二つを選ぶ。子どもが無邪気に無心に遊べるのは人間の子どもが先験的な能力、誘引性に従うからである。直観的に世の大人たちは、それを夢中だという。まさにその通りで、夢の中にあるとは、夢がその人を誘い続けるからである。また、本来遊ぶとはそのような没我的な、無個性的な、神との交流状態をいつてきたのであった。誘惑される以外、何も感じない状態のことである。だから、夢が夢たり得る絶対的条件は、その当人の意志を越える強力な誘引性を放つものといわねばならない。我々は、長年の研究経験によって、夢を判定する絶対的視点を持つことができるようになった。夢はその人をこよなくそのかし、おだて、うつつを抜かすまで途方もなく拉致状態に追いやられてしまう。今にして思えば、「少年よ、大志を抱け」とか、「希望遙けし」とか、よくまあ無責任に、かつての人たちはいかにもそれが教育の最高の評語のように声だかに言って退けたものである。今日のオウム事件にお

いてさえも、まことしやかにマインド・コントロールなどという。夢はいかなる他人によってもそのかされることはいらない。本人が本人の夢の誘引性によって影響を受けたと世間の人はいうが、仮にそのような場合は、己が己の夢の誘引性に委ねることをマインド・コントロールされたとしているのである。いかに強いカリスマ的影響を受けようとも、当事者がそれよりも強い先験的夢を持つならば、その支配下に屈することは考えられない。日本語は、それをいのちといい、そのいのちを見ることを、い(ゆ)め、と呼んできたのであった。今日のような苦悩、混乱、忙殺の繰り返しのような世の中にあっても、揺籃期あるいは青春時代という言葉の甘い響きは何が孕まれているのだろうか。いうまでもなく、夢の中にある、何よりも生かされていたいのちの思い出を想うからであろう。

私たちは先ず何よりも前に、人間生活の優位性に夢の誘引性を掲げる。私たちは、今日における人間の最高の頭脳よりも、人間の持つ、原始より今日に至る先験的夢の働きを信ずるのである。

一般的には、こういう論説に対して、人間の思考力を過小評価し、かつての無為自然に帰ろうとする退行現象であると蔑む人もあるかもしれない。しかし、そういう反対論者には、われわれは次のことを告げたい。人間の先験性とは、人間のあらゆる能力以上に優れた予知能力であるということを。予知能力とは、今、世の中で流行しているような超能力と一足跳びに思ってしまったのは困る。我々の使う予知能力とは、来たるべき将来における己の生活と

関連ある予告としてしまうものをいう。平たくいうと、夢はなぜだか、己の生活と関係のある徴候としてしまう。つまり、夢と現実などといった関係のあるように言ってしまうのも、夢の特徴なのだろうか。ただし、このとき、その夢が正夢であるか、逆夢であるか、判定する能力は別である。その夢が現実生活との関係において当たる当たらないは、その先験性を保証するものとは決して一つではなかったはずである。本論でいいたいことは、その夢が現象・事象と、正夢・逆夢と言うよりも前に、一つであると思ってしまう強烈さである。時には、体が震え、目の色が変わる程の感情を伴う。夢は停止しない。夢は走り、跳び、震え、落ち、跳び込むことさえ在る。夢は現象における認識と同じでは決してない。ところが、往々にして、夢は体感と一つになる。今のところ、夢の内容に体が反応した結果が体感なのか、体感の特徴として夢が成立しているのか不明である。だが、夢が世界構造を持つことまでは、われわれは明らかにしている。

さて、今一つの発達性とは何か。だれしも経験のあることではあるが、小さいときからいつまでも同じ夢を見ることもあるが、我々の研究調査結果からでは、夢には年齢的発達があった。我々が子どもの「夢」の内容と働きを明らかにするために、子どもたちの無意識に働く先験性を見届けた立場から、「穴」という課題を与えて作文させた結果、その無意識に極めて明瞭な年齢的発達があることを知ったのである。(詳細は『子ども文化の原像』日本放送出版協会・一二六頁―一四二頁・「穴」の作文を参照)低学年ではほとんどの子が落とし穴を書いた。近ごろで

は落とし穴を作って遊ぶ経験も少ないはずの、コンクリート空間に遊ぶ子どもたちが、それを書くのである。素材が既に偏りを見せるだけでなく、そう書く子がまた言いあわせたように、その落とし穴に落ちると書くのである。この段階が終る中学年生は、落とし穴がトンネルとなる。つまり、原始穴居生活者が、堅穴から横穴式に変わるように変化するのである。三、四年を終えて五、六年生となると、トンネルを越えた向こうを書くようになる。つまり、川端康成の『雪国』式だと思えばいい。さらに、ここで留まりはしなかった。穴は鏡である、また、穴は友だちであるとまで書く子どももいたのである。

無意識の発達についての論考は専門の方々に任せる以外ないが、夢の世界の世界構造だけは、明確に偏向的発達の段階があることが明らかとなった。それは個人差でもなければ能力差でもない。明らかに、小学校段階で示した年齢差であって、その事例が転倒することがないことによって、発達と呼んだのである。中学校以上は未調査なので、この年齢段階まで含めると発達といえるかどうかは未定である。

2 世界定めIIトランスフォーメーション

さて、以上は、既発表分と重複するところもあるが、全体把握のためには止むを得ないとして承承してもらえらるであろうか。全文論旨として研究経過の未発表分を補足することが生じている。柱立てとしては、夢の世界構造についての子どもたちの無意識的認識を問題とする。長つたらしいので研究会では

「世界定め」と呼んでいるものである。「変な夢を見た。」「わけのわからないゆめであった。」と、子どもたちが言ったとしても、何らかの組み立てを持つ夢だということである。たとえ、逃げ出したいような夢だとしても、拒否、脱出したい世界としてその夢を見ていることになる。だからその作り方（本人は多くの場合それに関与していないと思っている）を考察した報告である。

夢とは、イマジネーションであると考えねばならないだろう。「人間のこころはイメーજタンクである。」と考えたのは、故藤岡喜愛であるが、子どもたちの書いた夢の作文を読むとき、確かにそうであったと思えるのである。まず、子どもたちがどのように生きているかを、その作文からうかがおう。

コップの中 一年生 男 T・S

ぼくは、きょうおもしろいゆめをみました。それは、つぎのようなゆめです。

ぼくがこうえんであそんでいたとき、すべりだいの下にコップがありました。そのコップをぼくはのぞいてみました。

すると、ぼくはちいさくなって、コップの中にはいつてしまいました。

ぼくはコップの中を歩いていきました。すると、またまたふしぎ、まわりがうみになりました。ぼくがおよいでも、かいたさかながみつかりません。

ぼくはもつとそこにちかづきました。こんどは、えびやかいたさかながいました。ところが、

犬がおよいでいるのです。（後略）

この後は、いわゆる冒険譚となる。くじらの背中から海に落ちたぼくは、元の大きさに戻り、同時に滑り台の上にいたのだそう。そこで目が覚めた、という。

私たちは、私たちの研究会での調査のための課題「壺」作文で、イメーજが、子どもたちを別世界に拉致してしまう事例を数多く見てきた。この作文ではコップが壺の働きをしているように思う。さらにもう一つ、滑り台は、懸け橋として、こちら（現）からあちら（夢）の世界へこの子を送り届けたと考えることができる。

つまり、夢はいつも世界限定とともにあるということが出来る。同時に、それはいつも、世界時空転換を意味している。このような時空の転換のイマジネーションは、私どもの研究会ではトランスフォーメーションと言っているが、その世界定めが突飛であり、明瞭であればあるほど、即ち、時空転換の強烈なものほど、これこそ夢の力であると思っているのである。

白昼夢 四年 男子 T・N

僕は授業中に、不意に白昼夢を見ていた。

島崎藤村が書きい入って、何か書きものをしていたらしい。結論を言ってみると、それは代表作である「椰子の実」である。原稿用紙の右はしに書いてあった。

書いている途中、誰か、近づいてくる。足音が大きくなって、部屋に近づく。しうじがガ

ラリとあいた。その人は妻らしく夕飯のしたくができたらしい。食べ終ると風呂に入っていた。風呂から上がり、藤村が、書きいに入ろうとしていた。

「はっ！」

僕は、初め回りを見渡すと、何事も起きてはいなかった。時計を見ると二十分ぐらいたって。よく考えると、場面が八分ていどずつ、変わっていったような気がする。（後略）

正に白昼夢と題するふさわしい例であって、子どもたちが、いかなれば夢と現の二つの世界を行き来していることがよく分かる。即ち、これを潜在世界と顕在世界の間と言換えてもよいと思う。これも先の例と同じく時空の転移であって、イマジネーションの発動をそのまま写したものであることは言うまでもない。

次の例は、「絵を見て作文を書く」と出して、村上華岳の「二月の頃」を見て書かれたものである。

無題 六年 女子 K・A

この前、写真の整理をした。そのとき出てきた写真の一枚です。裏には、「昭和六年九月二日磐梯山」と書いてあった。そんな昔のことは分からないので母に聞いてみた。母は「私も、まだ生まれていないからよく分からないけど、この景色からだとか津みたいねえ。おばあちゃんの写真じゃない？」と言った。「なるほど、それならあうな。」と思った。祖母のいなかには会津だし、昭和六年なら生まれているからだ。

(後略)

ひとつの発想を包み込む発想の獲得ともいえるが、もう少し丁寧ないうと、あるイマジネーションの確認がなされたということである。つまり、この写真を「おばあさんの写真」とするために、まず、おばあさんの存在を、昭和六年の磐梯山の「絵」が裏付けるのである。言い換えれば、この絵が祖母存在の時空、つまり祖母を住まわせる世界を決定したことになる。イマジネーションによる時間空間の転移・転換が世界を確定させるのだということであり、この母と子はそのことによって、祖母を共有するのだと考えられる。次に最近、とみに考えさせられた児童詩を掲載しておきたい。百行余もある詩のほんの一部である。

僕は虫けら 六年 男子 T・K

(前略)

ああ、秋風に夜もふけて
はるかな月も笑っているよ
ああ、つゆも干ぬ朝焼けに
大地の山々笑っているよ
宇宙が笑いに満ちる時
僕はただただ飛んでいる
僕らは飛ぶだけ飛ぶだけさ
僕は虫けら
つまらないやつ

前後左右と上と下
三つの軸の座標の中で

ちよつと羽音を高くさせ
飛んでいるのさ
このむなしさを

ああ、だれが知る

知るものか

僕は虫けら

つまらないやつ

アリストテレスの頭の上に

僕らはやっぱり飛んでいた

秋風去りゆく五丈原

僕らはやっぱり飛んでいた

ワシントン家の桜の幹に

僕らは確かにとまっていた

だけどそんなこと誰が書く

僕は虫けら

つまらないやつ (中略)

僕は虫けら

つまらないやつ

だが、人間のみなさんよ

僕らの知ってるこの広い空

君らの知らない世の中に

かつて気ままにくらすのも

君らより落ちると思えんよ

僕は虫けら

それでいいのさ

僕は虫けら

それでいいのさ

僕は虫けら
幸せさ

明恵上人のことは「今八十三ナリヌレバ、年スデニ老イタリ、死ナムズル事モチカヅキヌ」を、思いださせる詩である。人が、現実世界にだけしか生きられないのなら、十二・三歳でこのような老成をしめすはずがないのであろう。また、夢すなわちイマジネーションが世界を定めるから、地球という空間、世界史という時間のなかに、自己を捉えることも可能となる。

しかし、誤解のないようにしたいことは、世にいうような文学表現主義的な想像力をいうこととは区別したい。

3 夢と風景

山水画の楽しみかたの一つに、「臥遊」と称されるものがあるという。観る者が画中の人物と心的交換現象を起こして、山水の逍遙を楽しむことをいうのだそう。さらに、絵の前に「題詠」がおこなわれたことも、我が国の山水画の鑑賞方法の一つの特徴であろうと、中村良夫氏は述べている。

先に取り上げた、村上華岳の「二月の頃」を見て書いた児童作文のなかに、ここにいう、仮想の逍遙があったことを見出したのである。

絵の中の旅行 六年 女子 T・S

ここは、小高い丘の上。私の目の前には山がそびえている。

「何ていう山なのだろう。」

目をこらすと白い幹が見える。

「あれはきつと白樺だ。白樺の山だから白樺山だ。」

いろいろ思いをめぐらせながら、見知らぬ土地の風景を眺めた。

中央に見える一本の白い小道。親子が笑いながら村のほうへ歩いていく。

「今日はね……」

と楽しいそうに子どもが話すのを、母親がほほえみながら聞いている。

ここからでは遠すぎて顔さえ見えないし聞かない。しかし、わたしにはこう想像された。

今度は丘の下のほうに目をやった。

牛を引きながら、

「今年も豊作だといいいねえ。」

といいながら、田を耕している百姓に話しかける。

「そうだねえ。今年もがんばっていいこうじゃないか。」

この土地の人は、初めてあった人でも、決してあいさつを忘れない。私の横でも

「おはようさん。」

「ええ天気ですなあ。」

のことがとびかう。

私は五、六歩後ろに下がり、もう一度全景を眺めた。

田畑のあちこちに働く人がある。

「まだ日が出たばかりなのに、みんなよく働くなあ。」

もうすでに、子どもも老人も外に出ている。両親の手伝いをして、泥まみれになっている子も、起きてきたばかりで深呼吸をしている子もいる。

「さあ。私もこのいい空気を吸おう。この土地とは今日でお別れだ。」

私は息を思いきり吸った。

ここまで考えて私は目を開いた。ここは教室の中。前には大きな田園風景の絵がある。私はゆっくりと息をはき、ペンを置いた。

現の世界から夢の世界へ、イマジネーションによる転移が行われて、作者はあちらの世界で一時逍遙し、またこちらに帰ってきたということになる。次のような作文もあった。

この絵のすみに作者は？

五年生 男子

M・K

僕は空を飛んで、この絵のすみにいるはずだ。この絵には人間は百人以上いるはずだ。さがせばいくらでもいる。畑で村人が働き、向こうに家がかたまつて立っていた。この手前に雑木材があり、遠くに杉と思われる木が生えた山があり、……あーいた！。あの杉の木陰に、飛びつかれて休んでいる僕とクラスの仲間がいたのだ。きつと、作者が描いてくれたのだ。感謝、感謝！「見える？」

作者は鳥になったのだろうか、その上で逍遙をしたというふうに理解できる。同じ絵を見ているのに、

それぞれが思い描いたことは、これほど違う。すなわち、これがそれぞれの景色である。トランスフォーメーションによって既にこの子たちは風景という捉え方をしているということである。中村良夫氏は、現実景において仮想的逍遙を人がしていることの傍証として山水画を取り上げたのだといっている。本論で、この問題を取り上げたのは、先述の「世界」がなぜ子どもたちにとって苦も無く認識対象としてその中にすべり込んでしまうのか、考えてみたかったからである。仮に中村氏の風景論を借りるならば、子どもたちは実空間においても、風景という捉え方を起こしているということになる。

もう少し、直接的な言い方をすれば、夢は一幅の山水画の鑑賞にもにているということになるだろうか。ただし、本論にあつてはその技術性を言いたいのではなく、画の外と内との心的交流の問題である。やっぱり、人間というものは、トランスフォーメーションの発動として夢を見ているといわねばならない。

4 夢の働きとしての 帰性

結局、子どもは夢に依存しているのだと考える。子どもが夢に依存する理由について、「夢の持つ呪術性」という一般論から考察を試みたい。

我々は、この考察のために、「手形占い」の作文を書かせた。好きな色の絵の具で手形を押し、そこから広がつてくる思いを自由に記述させた。いわばロールシャッハテストの児童版である。対象は小学校三年生と四年生で行った。

手形うらない

三年 女

(前文略) わたしの手はのろわれている。きみょうなことまですみずみにあらわれている。夜になると手が歩いてきて、わたしのしょうらいをおしえてくれる。あるいはゆめのなかで。わたしがねていた。そしたら手が歩いてきた。わたしはむしした。でもしゃべってきかぬ。しょうらいのこわいことや、いやなことばっかりだった。

手からのひみつ

四年 女

私の手とは何だろう。ひみつを教えてください。体の一部分。しょうらいのことでも、この手を見れば分かる。まるで体の中の預言者のよう。(中略) 黄緑でうつした手形は「しょうらい、野原のように、さわやかに生きよう。」と言っているようです。

子どもの基本姿勢は、これらの作文に代表されている。みんな、ごく当然のこととして手形から自分の運命について思いを巡らせながら、作文を書くのはどうしてだろうか。

子どもにとって、現実世界の出来事は、起きてみなければ分からないことではない。イメージ世界(夢)では既に決定されているという立場をとらざるを得ない。

うらない

三年 女

わたしは、うらないはあたると思います。わ

たしだって、きのうの夜、ゆめの中にまほうつかいがでてきて、「あなたは、学校で四時間目に作文を書かれますよ。」と言いました。

そして、わたしは手を見たら本当におきるようなかんじがしました。それは、しわが作文という形になっていたからです。

この内容の真偽はともかく、今問題にしたいのは、ある出来事に対して、子どもが「えっ?」という意外性ではなく、的中性というべき「やっぱり」との感覚を伴わせていることである。夢の世界での出来事に、現実の世界現象の原因の説明ができるとするこの符号性はどこで獲得するのであろう。世にいう「夢うらない」である。

うらないはしんじない

三年 男

えしこかった。それは、ただ手にえのぐをつけて紙にうつしたやつだった。じつを言うところ、だいたいぼくはあんまりうらないをしんじない。ドキドキしたり、ふきつなよかんがするのはいやだ。いやなことは、ぼくは大きらいだ。もしそういうのをしんじていたら、ぼくはたぶん起こらないようにとねがっていると思う。だからうらないは、あんまり好きじゃない。

この手を見ていると、自分の首が切れるように見えて、手も切れるように見えてくる。ゆめの中にまで出たらやだな。(後略)

この子どもは、いわゆる一般的な占いの行為を拒否して作文を書き始めているにもかかわらず、占い

の結果が夢の中に具体的な形となって出てくることを恐れている。夢がそうした現実を呼び寄せるのではないか、といういわゆる呪術的思いが無意識に働いているといえる。

ゆめがすぎ

三年 男

ぼくは手形うらないはしんじていません。なぜかというのだいっきらいだからです。うらないより、ゆめのほうがよっぽどましです。なぜかというと、まさにゆめがおきるかもしれせん。だからゆめがすぎなんです。ゆめはねてるときもうかびます。おきてるときもうかびます。(注、この様に書きながらも、後半では、確信を持って手形占いを書いている。)

うらない

三年 女

うらないはゆめのこと。わたしは、何かを決めるとき、うらないでしています。うらないは、まだほかにいろいろあります。うらないは役に立ちますね。(中略) 手形つてもうひとつの友だちみたい。いつもいっしょにあそびたいな。(後略)

手形うらない

三年 女

今日は、なんだかワクワク。作文は苦手でも、うらないと聞くとじつとしていられない。(中略) 大きくなるたびにいろいろなうらないをして、みんなのやくにたちたいです。

夢の世界でよいことが起こりさえすれば、現実の世界での幸せも約束される、という思いがここにはある。誘因性といい、反発性といい、子どもたちにとっては決して夢と現実との関係というより、夢そのものが、生きることの指針を示すものとする根元があるのだといわねばならない。つまり、夢より発し、また夢に帰って行く、生命の羅針盤の働きをするのが夢なのであろうか。最後に蛇足となる百言の説明よりも、本論旨にかわる有力な一篇の児童作文を掲載する。

六年 男

多くの先祖は実は、あの天才と言われたガリ
レオ・ガリレイなのだ。なぜ外国人と血がつな
がっているかと言うと、ペリーが黒船で横浜港
に來た時の黒船の中にまぎれて上陸したのであ
ります。

いえ、ガリレオ・ガリレイだけではありません。野口英世やシュバイツァーのかくし子の血も混じっているのです。医者の資格を取った野口英世たちは子孫の血だけは完璧な血液にしておこうと、研究を重ね、改良したのです。そのため、その血を受けついただくは採血しても何の異常もなく平和に過ごしていられるのです。

さつき出て来たガリレオ・ガリレイは、ほんと会い、話をしたことがあります。ガリレオはタイムマシンを造り未来に来たのです。アメリカ

「タイムトラベルは理論的に不可能ではない」と発表したのが、その何百年も前にガリレオはすでに実現していたのです。

ガリレオはタイムマシンを作る計画を立てましたが、その中にはどうやったらタイムマシンを作ることができるかというようなこともふくまれていました。だからタイムマシンそのものを作るより時間がかかったようです。

カリレオは、天然發生のタイムトンネルともいえる「ワームホール」を人工的に發生させる機械の研究をし、その機械をマシンにとりつけた。そしてタイムマシンが完成し、「ワームホール」を通じて、時を超えた空間に突入し、今から行く時代を八万世紀として、場所はもちろん地球とした。そして、無事地球に着いた。

地球はなかった……。太陽の接近によりマグマが暴れ、そのとほうもないパワーに地面はたえきれず大爆発したのであった。ほうぜんとしてしまったガリレオは、自分の時代に帰る途中、マシンの操縦をあやまりほくの時代に着いてしまったのである。着いた場所がほくの家の庭だったからガリレオと話したことがあるのです。ガリレオは無地家に帰った。そして子孫のほくが生まれた。

ほとくの先祖は、宮城県の伊達氏領内に住んでいた。

ある時いくさに負けて逃げて帰ってくる時、
けがをしていたので、敵兵からのがれるため、
さといも畑の大きな葉にかくれた。それで命拾

いしたので、それ以来いにも感謝し、家紋にそのいのちの葉を使うようにした。そして、玉田家では、さといもを食べない事とした。そのしきたりは、ぼくのおじいちゃんの代まで固く守られていたそうだと。

その時、先祖は逃げたけれども、伊達藩は勝利をおさめたので、ほうびに刀をさすかった。その刀は代々受けつがれて来たが、太平洋戦争後、アメリカ軍の指示で折られ捨てられてしまった。しかし、その伊達家の紋のついた刀の「つば」は今でも大事に残されている。

ぼくは、「人類みな兄弟」というんだからほか
 にもいろんなすぐれた人と血がつながっている
 んだ。これからは何事にもおそれず、自分が正
 しいと思った道を歩んでいこう。

每日新聞社主催 第14回 毎日21世紀賞 応募論文

テーマ「人間と夢」 平成七年六月

